

日蓮大聖人御書全集

そやにゆうどうどのごへんじ

曾谷入道殿御返事

もんじそくほとけ こと

（文字即仏の事）

そやにゆうどうどのごへんじ もんじそくほとけ こと

曾谷入道殿御返事（文字即仏の事）

ぶんえい ねん

がつ

さい

そやきようしん

文永12年（75）

3月

54歳

曾谷教信

ほうべんぼん

ちようぎよう

か まい

そうろう

さき

まい

そうら

方便品の長行、書き進らせ候。先に進らせ候いし

じがげ

あいそ

よ

自我偈に相副えて読みたもうべし。

きよう

もんじ

みな

しようじんみようかく

みほとけ

この経の文字は、皆ことごとく生身妙覚の御仏なり。

われ

にくげん

もんじ

み

れい

しかれども、我らは肉眼なれば文字と見るなり。例せば、

がき

ごうが

ひ

み

ひと

みず

み

てんにん

かんろ

み

餓鬼は恒河を火と見る、人は水と見る、天人は甘露と見る。

みず いち

かほう

したが

べつべつ

きよう

もんじ

水は一なれども、果報に随って別々なり。この経の文字は、

もうげん

もの

み

にくげん

もの

もんじ

み

にじよう

こくう

盲眼の者はこれを見ず、肉眼の者は文字と見る、二乗は虚空

み ぼさつ むりよう ほうもん み ほとけ いちいち もんじ こんじき

と見る、菩薩は無量の法門と見る。仏は一々の文字を金色の

しやくそん ごらん すなわ ぶっしん たも

釈尊と御覧あるべきなり。「即ち仏身を持つ」とは、これ

びやつけん ぎようじや

なり。されども、僻見の行者は、かようにめでたくわたら

たも は たてまつ

せ給うを破し奉るなり。

あいかま あいかま いねんな いっしん りようぜんじようど ご

ただ相構えて相構えて、異念無く一心に靈山浄土を期せ

まへろ し こころ し

らるべし。「心の師とはなるとも、心を師とせざれ」とは、

ろくはらみつきよう もん いさい げんざん とき ご そうろう きようきよう

六波羅蜜經の文ぞかし。委細は見参の時を期し候。恐々

きんげん

謹言。

ぶんえいじゆうにねんさんがつ にち

文永十二年三月 日

にちれん かおう

日蓮 花押

そやにゆうどうどの
曾谷入道殿